

れた。

II. 膀胱穿刺尿の培養成績

採尿バッグ、あるいは中間尿培養で陽性(10⁵以上)を示し UTI を思わせた新生児2例、乳児2例、学童3例について膀胱穿刺尿との比較を行った。中間尿培養で陽性であった学童2名では膀胱穿刺尿でも陽性であった。他の5例は採尿バッグで陽性であったものであるが膀胱穿刺尿は何れも陰性を示し、採尿バッグ法では Contamination が多いことが推定されたが尚症例を増やして検討の必要があるものと思われた。

III. 幼児集団検尿成績

保育園3施設、幼稚園1施設、検査人員337名について、早朝中間尿を持参させ、BMテスト No. 3(細菌蛋白、ブドウ糖、pH)、BMテスト S(潜血)を用いて検

尿を行った。

尿異常児は外来に呼んで再検した。最終尿異常児は、細菌尿1名(0.3%)、糖尿1名(0.3%)、血尿2名(0.6%)であった。糖尿児は入院精査の結果腎性糖尿と診断、血尿の2例は外来で経過観察中である。

細菌尿症例

6才、女児、ペーパーテストで細菌尿(卍)のため定量培養を行った。E. coli 7.8×10⁸、尿蛋白(-)、尿沈渣 RBC 1/3~4~12-15/1、WBC 70-80/1~10-15/1、尿細菌は3回共陽性で E. coli 10⁷⁻⁸であった。AB-PC 600mg/d、7日間使用後 ps. malfophilia 2×10⁸→(-)となった。本例は自、他覚的所見ともに認めなかったが、CRP(+) IVT 正常、尿中 LDH 総活性量 37mV/ml、TypeV 0%で下部 VTI を思わせた。

業 績 報 告

新潟県立吉田病院小児科 吉 住 昭
高 田 恒 郎
谷 沢 隆 邦
常 山 佐 世子
柳 原 俊 雄

1) IVP 像にみられた尿路異常について(表1)

51年4月から53年6月末の間に入院した腎尿路疾病の患者について、IVP 実施者中の尿路異常の見られた頻度は9.2%である(表2)。

同じ期間内の外来における IVP 尿路異常の頻度は、14.0%であり、両者併せて、22例の患者がみられた(表3)。

この22例の患者の病型分類は、発育不全腎5例、うち

両側性3例、偏側性1例、あとの1例は右が骨盤腎、左は無機能腎であった。

いずれも腎不全に陥っており、3例が透析中である。

大きさと数の異常が5例で、うち1例は術前診断困難な、巨大重複腎盂尿管の例であった。臍高位に達する巨大膀胱例は、両側腎とも矮小で腎不全である。

水腎症が6例で高度の2例は腎不全に陥っており、片側は無機能であった。他の4例は、尿路感染症を契機として発見された。

表 1

県立吉田病院小児科
(51.4.1~53.6.30)

入院患者実数	679名		
腎尿路の疾病	203名	男 121 女 82	
IVP 尿路異常	18名 (8.8%)	男 10 女 8	8.2% 9.7%
		I P 実施者	率
3ヵ月以上長期入院	149名	149名	100%
3ヵ月以内短期入院	54名	45名	83.3%
IVP 尿路異常頻度	18/194		9.2%

表 2

県立吉田病院小児科
(51.4.1~53.6.30)

外来 I P 実施者実数	50名		
		男 23 女 27	
I P 尿路異常者	7名	男 2 (1) 女 5 (2)	
		() 内は入院患者と重複	
外来 I P 尿路異常頻度	7/50		14.0%

VUR は本研究の分類Ⅲが2例, うち1例に逆流防止手術を行なった。分類Ⅰの患者は抗生剤治療でVURの消失しない1例を掲げた。下垂腎も3例あり, 実戸の分類Ⅱ°が1例で蛋白尿, 血尿で発見され, Ⅰ°が2例で尿路感染から発見された。

2) 血液透析患児にみられる尿中白血球について

透析患児が乏尿に傾くと, 有意の細菌尿を認めないにもかかわらず尿中白血球の出現が多くての症例でみられた。図1は透析導入前より尿量の推移を追えた7例について白血球尿の出現と透析期間, ならびに尿量をみたものであるが, 白血球尿は透析期間とは関係なく, 尿量減少と

表 3

分 類	例数	%	備 考
發育不全腎 (兩側偏側)	3	13.6	透析 2 腎不全 腎不全 透析
右骨盤腎	1	4.5	
左無機能腎	1		
左巨大重複腎盂尿管	1		血尿 腎不全 O・A ネフローゼ症候群 アルポート症候群
巨大膀胱	1		
右重複腎 左重複腎盂	1		
左重複腎	1		
左重複腎盂	1		
左水腎尿管症(E) 右無機能腎	1		腎不全
右水腎尿管症(E) 左無機能腎	1		
水腎症(左D)(右B) 下垂腎Ⅰ°	1		尿路感染症
水腎症(兩側C) VURIB	1		
水腎症(兩側C) (VUR 術後)	1		
水腎症(左B)(右A)	1		
VUR Ⅲ	2	9.0	尿路感染症 尿路感染症
VUR Ⅰ	1		
下垂腎Ⅱ°	1		学校検尿 (蛋白尿, 血尿) 尿路感染症
下垂腎Ⅰ°	2		
計	22	100	

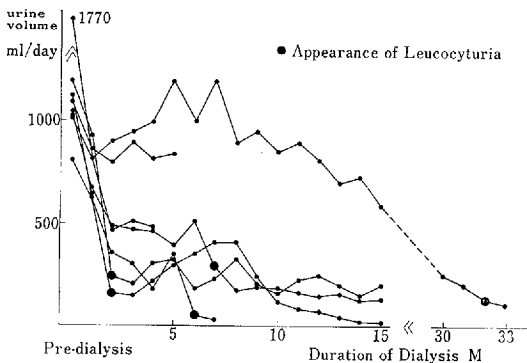


図 1

相関がみとめられた。乏尿をきたした7例に膀胱造影を行ないVURの有無をみたが, 7例中2例に腎内逆流を認めたが, VURを認めない例にも白血球尿をみておりVURと白血球尿は関係がないと考えられた。又, 液性免疫, アジドシスの程度なども尿中白血球出現に関係しているとは考えられなかった。又, 白血球尿のみられた例に頻回に嫌気性菌の培養を試みてみたが1例も検出されなかった。図2は透析患児の尿中細胞成分につき検討したものである。明らかな尿路感染症で膿尿を認めた14例の白血球尿の内容は多核白血球79.9±10.1%であった。透析患児のそれは75.1±12.8%であり, 尿路感染症の白血球尿との間に有意差を認めなかった。透析患児の尿比重は低く, Addis 数を見るのは不適當と思われるが, 新鮮尿の白血球の程度とその日の Addis 数をみたところ, 白血球尿の程度と Addis 数に一定の傾向はなく尿量との相関が強く考えられた。

以上より, この白血球尿の由来については, 尿が膀胱内を含めた尿路に長く停滞するために白血球, 上皮細胞が濃縮された形で出現する可能性, 又白血球の内容から非細菌性感染が起っている可能性が考えられるが, これらで白血球尿の由来について説明がつくとはいいい難く, 白血球の機能も含めて更に検討をくわえてみたい。

	multinuclear(%)	monocyte(%)
Hemodialysis n=12	75.1±12.8	26.3±15.4
Urinary tract infection n=14	79.9±10.1	21.9±11.6

図 2 Contents of Leucocyturia

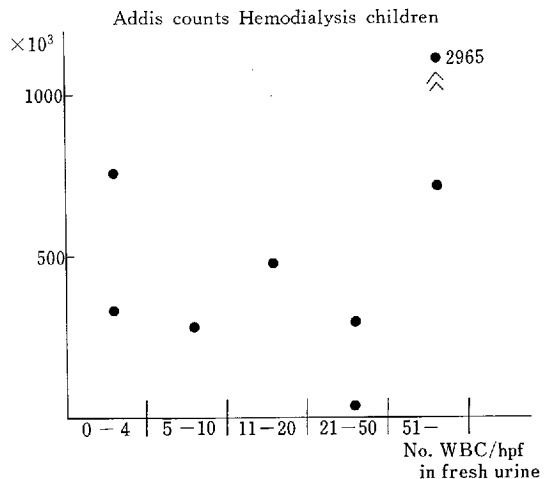
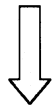


図 3



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1) IVP 像にみられた尿路異常について(表 1)

51 年 4 月から 53 年 6 月末の間に入院した腎尿路疾病の患者について, IVP 実施者中の尿路異常の見られた頻度は 9.2%である(表 2)。

同じ期間内の外来における IVP 尿路異常の頻度は, 14.0%であり, 両者併せて, 22 例の患者がみられた(表 3)。